

着地して羽をおさむるシラサギの空を知る者のみの
法悦 屋良健一郎

何分間か空を飛翔してきての着地の感覚は、たとえば
鉄棒から飛び降りての着地とはまったく別種の感覚なの
だろう。表現的には、着地したときではなく、「羽をお
さむる」ときに焦点をあてて、成功。

手応えを探りて前へつき進むオーガの回転いよいよ
高し 尾上宏

「オーガ」は電動除雪機の刃の部分のこと。冬の信濃
の深い雪を除雪して道をつける場面だろう。上句、起伏
や障害物を、音や手応えでたしかめている感じか。近年
は「見る」歌ばかりが多いなかで、作中人物が行動して
いる作として注目。

絵本ではカラスは子どもに乳をやる乳首は二つつい
ているらし 奥村知世

幼い息子さんの絵本が題材。擬人化されたカラスを、
擬人化の枠をふと外して見せた面白さ。いい感覚だと思
う。ただ、「は」が三つあるのはいかに無造作。減ら
す工夫をした方がいい。

きさらぎの水におなかをくすぐられ離れて浮かぶ白
鳥と鴨 佐々木寛子

下句が、うまい。とりわけ「離れて浮かぶ」がうまい。
これによって水面の広さが想像されるし、えさ場ではな
いらしいことも分かる。

「いづみ湯」が今日は更地になっていて親父の貼り

短歌の現在

No.422 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

紙はる所なし

田中和美

昭和のにおいのするレトロな銭湯が、廃業し取り壊さ
れた、そんな小さなドラマに取材した作。その風呂屋で
は、親父の貼り紙が名物だったのだろう。

肌色で猫の描かれてゐる不思議眺めつつ行く保育園
前を 佐藤モニカ

作者が妊娠中の作が並ぶなかの一首。つい母親気分
で、保育所に目がいつてしまうという文脈である。擬人
化して肌色に描かれた猫なのだろうか。もしそうなら
ば、たしかに「えっ！」という感じ。

試験棟取り壊されて更地あり消火器一つ生きて残れ
り 青山仁

更地になぜか残されている消火器。もちろんすぐに回
収されるのだろうが、不似合いな赤が目につく。「生き
て」が利いている。第三句「……あり」と第五句「残れ
り」がともに「り」で終わっていて、強くひびく。こ
の一首では特色になっている。

開演の幕が落とされシンバルが王様のように裸で鳴
りぬ 石田郁男

サーカスの歌一連の第一首。「王様のように裸で鳴り
ぬ」が見どころで、「裸の王様」ではなく「王様のように……鳴りぬ」とつづくところがポイント。春はサーカ
スの季節。その開演の幕が落とされた場面。細かいこと
を言えば「鳴りぬ」の「ぬ」が気にかかる。完了形でな
かった方がよかつたろう。